

瓜生道也教授のご逝去を悼む

九州大学理学部 教授・瓜生道也 博士が、去る8月23日、51歳で急逝された。我々同学・同輩の者にとっては、未だに信じられない思いである。3月に学会会議の委員会でお目にかかった時まで全く普通に活動しておられたが、その後、微熱が続くので入院して検査をするとうかがった。それから5カ月、不治の病と知ってからも、全く平常心を失うことなく淡々と病と闘っておられたが、我々の願いもむなしく帰らぬ人となられた。

瓜生さん（長い間の友人として、こう呼ぶことを許して頂きたい）は、1962年九州大学理学部物理学科を卒業され、大学院に進んで、澤田龍吉先生の指導を受け、地球流体力学の実験的研究を始められた。1965年に助手となられた直後、澤田先生と共に新設の大気物理学講座に移られ、翌年そこに助教として赴任した私は、瓜生さんと親しくおつき合いすることになった。この頃、瓜生さんは、回転水槽の実験を行っており、*vascillation* 現象や卓越波数の変化と同時に熱輸送が大幅に変わる新現象の発見など、興味深い研究成果をあげておられた。実験の再現性が完全でなかったことに瓜生さんが大変慎重であったため、これらの結果が *publish* されなかったのは残念である。

その後、瓜生さんは、自分自身の研究としては理論的なものに重点を移し、1970年代に、波と平均流の相互作用に関する研究を多数行っておられる。中でも、1974、75年に発表された論文で、波動の記述にラグランジュの観点をとり入れることによって、上方に伝播するロスビー波が西向き運動量を運ぶこと、さらに緯度方向に積分してみれば、それが“波の（擬）運動量”と一致することを示されたのは画期的で、それに続く世界中の研究の先頭を行くものであった。瓜生さんは、この研究によって1978年度日本気象学会賞を受賞された。この一連の研究は、ロスビー波の有限振幅効果に関する一般理論であるが、このような基礎理論における国際的な貢献は、日本の気象分野としては初めてのものであり、その点でも瓜生さんの仕事は画期的であった。

瓜生さんは、その後、助教を経て、1980年には教授となられ、多数の優れた卒業生を気象界に送り出すと共に、九大内での地球物理学研究体制の充実に大変な努力をされた。その成果として、物理学科の地球物理関係4講座と地質学科との合同と拡充による地球惑星科学科の

創設が現在進行中である。

気象学コミュニティにおいても学問の発展の基盤整備に心を配られ、特に大気科学の将来計画作りを主導され、その結果は1989年の測地審議会報告の大気科学分野の部分の骨格をなしている。この中で強調されている気



候研究の強化を具体化するために、「気候システム研究センター」新設の運動が始められた。瓜生さんはその中にあって計画案作りを手早く仕上げられた。同センターは、東京大学付置の全国共同利用センターとして、来年度創設の可能性が高いが、この仕事に参画している者として、瓜生さんのお力がなかったら、このような早期の実現は無理だったと信じている。

九大・地球惑星科学科にせよ、気候システム研究センターにせよ、瓜生さんが自らの才能と研究を犠牲にして（もしかしたら健康までも犠牲にして）尽力された仕事の完成を目前にして逝かれたことは悔やんでも悔やみ切れない。

瓜生さんは、気象界切っでの教養人であり、研究者・科学者というより文人墨客の趣きがあった。否、彼にとっては、科学は間違いなく文化の一部であり、それ故に科学の道を選んだ本当の科学者であった。社会科学・歴史・宗教・文学と瓜生さんの話題の広さ、知識の深さに我々は驚嘆し、彼との会話を楽しみ多くを教えられた。瓜生さんのこの教養の深さは、誰にも好かれる人柄とともに外国の同学者をもとりこにしていた。

研究者として、学界リーダーとして、そして魅力ある友人・先輩として、彼を益々必要とする時期に瓜生さんを失ったことは日本の気象界にとって文字通りかけがえない損失である。それよりも、年若く仕事半ばにして倒れた瓜生さんは、どんなにか心残りであられただろう。瓜生さんが残して下さったものを大事にし、日本の気象学を豊かにしてゆくことを誓って追悼の記とする。

（東大・理・地球物理、松野太郎）